

1 自己評価

(1) 一人一人の持てる力を高める授業の改善充実

- ①「一人1指導案」を作成し、授業を公開後、検討会を設けた。検討会ではポイントを絞り、グループ協議をすることで授業の改善点を明確にすることができた。また、公開授業研究会を実施することで、指導案をチームで検討する機会が増え、指導者の力量向上につながったと思われる。外部参加者からの建設的な意見を取り入れることで今後の授業改善につなげたい。

- ②文部科学省事業「キャリア教育・就労支援等の充実事業」の実践を通して、職業的自立に必要な力を育てるための授業について検討し、教員間の共通認識を図ることができた。様々な研究会で学校での取組を発信し、教育活動を振り返ることができた。

- ③社会人講師等を活用し、専門的な知識や技能の習得に努めた。得た知識や技能を各コースで工夫しながら授業に還元することができた。

(2) 地域、関係機関と連携した進路指導の充実

- ①アフターフォロー体制を関係機関と連携しながら、構築することに努めている。夏季休業中のアフターケアでは、職員がペアで2～3社を訪問する方法をとっているため、就労先の企業への連絡が訪問日直前となることがあったため、関係機関への連絡も遅くなり、同行してもらいにくいケースが多々あった。全教員にアフターケア実施について早めに提示することで、改善を目指したい。「職場開拓」に関する学校評価アンケート（保護者用）では、約20％が否定的回答となっている。保護者への発信が不十分なことが原因と考えられる。学校HP等を積極的に活用し、事業所等の情報を発信していく必要がある。

- ②検定取得を目標にして、様々な学習活動に意欲的に取り組むことができています。検定を受ける意義を教員間で共通理解し、生徒が積極的に受検できるようにはたらきかけたい。

(3) 特別支援教育に関する専門性の深化と理解啓発の促進

- ①生徒に関する情報の共有を丁寧に行うことで、問題行動に迅速に対応することができている。人権や性教育に関する研修会を計画し、問題行動の早期発見・早期指導ができる体制の構築を図っている。

- ②外部との連携が急務な生徒に対して、積極的に連携し、支援を継続することができている。特別支援コーディネーターやスクールカウンセラーを活用し、生徒の心理的安定を図っている。

- ③地域での貢献活動が定着してきている。主体的に取り組むことで生徒の社会性が向上している。また、地域交流の回数を増やすことで、生徒の自主性が育っている様子がうかがわれる。

④学校だよりや学校HP等でインターンシップや現場実習の様子を公開することで進路に関する情報発信を行った。進路指導の流れについては、外部への発信はできていないため、「進路通信」等を発行したい。

(4) 危機管理体制の再構築

①入学者選抜について抜本的な見直しを行い、危機感をもち入試を実施することができた。

②年間3回の避難訓練を行った。反省を活かしながら次年度の訓練を実施する。

2 学校関係者評価委員名

重松 孝治	(川崎医療短期大学 講師)
大島 美栄子	(倉敷障がい者就業・生活支援センター 所長)
片沼 靖一	(琴東地区社会教育コミュニティ推進協議会 会長)
片山 一夫	(児島産業振興センター 所長)
古家 訓史	(児島ハローワーク 統括職業指導官)
村上 健次	(本校PTA 会長)

3 学校関係者評価

(1) 第1回学校関係者評価委員会

〈評価委員からの意見〉

- ・アフターケアで馴染みのない教員が来ることになると、生徒が自分の不安を伝えられないケースもでてくることが考えられる。

- ・いじめに関する件では、いじめられている本人からの訴えだけでなく、いじめられている当事者以外、周りからの訴えをどう受け取れるかが大切。下関の虐待について、利用者本人からの訴えがなかったから放っておかれた。ここの生徒たちは自分で言えるから、本人だけでなく周囲の訴えをしっかりと受け取れる仕組み、ツールを作らなくてはならない。生徒が在学中は教員が親身になり、生徒の話を聞き、悩みを解消する事ができる環境がある。しかし、卒業するとその環境からいきなり放り出される状態になってしまう。それでは生徒は困ってしまう。卒業後のいじめや悩みについての相談方法を教えていかなければならない。次に繋げていくためにも、教員のカウンセリング力に頼らなくてもいい指導をすることが課題であろう。

- ・アフターケアの協力体制が倉敷琴浦高等支援学校と倉敷障がい者就業・生活支援センターとの間できちんとできていないので、一緒に行かせて頂きたい。しかし、生徒が独自で登録していれば巡回している。倉敷障がい者就業・生活支援センターの理解や利用を保護者の方に学校からも知らせて頂き、すすめてほしい。

(野球部を作ったことに関して)

- ・生徒の技術が向上してくると地域の人々の活用も考えてはどうか。技術的に教えることの出来る人を活用して楽しい学校生活を送らせてあげたい。

- ・座学よりも実践的な学習に軸をおいていることが分かった。少人数で手厚く指導されて

いる。一般の人より就業に向けての意識も高く、よくしていると思う。一般では3割が離職で「こんなはずではなかった。」といって辞める方が多い世の中なので、自分を認識してコントロールできる力をつけて自分を見直す教育が大切だと思う。

- ・ 転勤に関するデータをしっかり残すことで、本人に関わることができる。今後も学校とハローワークの連携を大切にしていきたい。この学校は実習を重ねて就職していることにより離職が減っていると思う。家族の支援不足、本人の認識不足で離職に繋がる事が多い。保護者と学校と連携して離職とならないようにしたい。
- ・ 3年間お世話になり、少しずつ変わってきている。しかし、注意したことが複数重なると言われていることが分からなくなり、していることが逆戻りしてしまうのでイライラしてくるようだ。全て整う人はいないが、優しい目で見てくださっている。学校と連携して一緒にやっていけたら思っている。

(2) 第2回学校関係者評価委員会

〈評価委員からの意見〉

- ・ 障害者の雇用未達成の事業所に対して何社か集めて見学をさせて頂きたい。
- ・ 例えば、縫製会社で言えば、会社毎に縫い方は違っている。学校で学習する時には基礎的なことを大切にしてほしい。それを身につけた後、会社ごとのマニュアルに対応できるようにしてもらいたい。受け入れ事業所とのコミュニケーションをとっていく中で、生徒一人一人にフィードバックしていける情報を集めてほしい。
- ・ 今の時代の方々を見ていて、持ってきてはいけないものについて、ルールを守ることに、ほんのちょっとしたことで崩れてしまうことがある。難しい世代だと思う。
- ・ 進路の橋渡しが毎年の大きな課題。11月から後期の実習があるが、就業と同行を考えてほしい。
- ・ LINEや携帯電話は、正しい使い方を教育が教えていく時代。ここの生徒は触れることができるので、使うことを前提で指導をしていかなければいけない。具体的に声のかけ方から教えていかないといけない。

(3) 第3回学校関係者評価委員会

〈学校からの質問〉

性的問題をきっかけとしてイライラして相手に暴力を振るい、生徒指導上の問題となるケースが4件あった。独自の性教育が必要なのだろうか。

〈質問に対する評価委員からの意見〉

- ・ 発達障害の人の犯罪は決して多くはない。発達障害の方は人からどう見られているかが分からないため、ストーカーが多い。隠すのも下手である。また、異性に対して興味が出てくる時に、どうしたら良いかが、分かっていない。具体的な異性とのつきあい方を学んでおかなければならない。

〈進路指導について〉

・「少人数だから進路指導主事が動ける」それだけで「動ける」と言うのではダメである。学校から発信するには全体で動かなければならない。安心感のある組織づくりが必要だと思う。今後も関係機関と連絡し合い、連携していく必要がある。

〈学校の様子について〉

・開校して6年。この学校は積極的に外に出ている。地域の中でも「よくあいさつができてい」と、よい評価が多い。

・琴浦の生徒は高校生らしい言動ができてい。有意義な目標をもって暮らしてもらうには、生徒各々に目標をもちやすい環境を作って欲しい。倉敷商業高等学校では、資格の取得を目標としていっていると聞いている。それを琴浦でもすることができれば良いのではないか。また、倉敷鷺羽高校のビジネスコースでは、ファミリーマートと連携してお弁当を作った取り組みがあった。それらは全て目標をもって取り組んでいる。その動機付けをしていく必要があるのではないか。1年生の頃から小さなことでも目標をもって取り組むことができるよう指導を継続してほしい。

・毎年アフターフォローで企業をまわっておられるようですが、今回で3期生まで卒業されている。今はまわりきることができているが、いつまでもまわりきれないと思う。そこで、アンケートをするのも一つの方法ではないか。企業や本人にアンケートをして、気になる事業所のみ訪問する。スムーズに就労できているところ、できていないところをしっかりと把握して取り組んでいって欲しい。

4 来年度の重点取組（今後の方向性）

○授業力向上・専門性の向上

○学校での取組のさらなる発信

○アフターフォロー・アフターケアにおける関係機関との連携